

岸内閣論

目次

- 一 はじめに
- 二 権謀術数まかり通る大会
- 三 岸外交の本質とその展開
- 四 藤山と田中(角)の登用
- 五 警職法の挫折
- 六 安保騒動の実態
- 七 岸の死生観
- 八 昭和政治の名場面
- 九 憲法改正の鬼
- 十 不人気のいくつかの理由
- 十一 岸政治はサムライ政治

今井久夫

一 はじめに

筆者は戦前の岸・信介を直接的には知らない。日本の商工官僚、満州国の役人としての活躍はただ新聞、雑誌、ラジオ、ニュース映画など当時のメディアを通じてのみ知るにすぎなかった。しかし類稀な切れものの印象は残っている。

戦後の岸については、その追放解除から、総理大臣を経て死に至るまでつぶさに観察し、接触する機会をえた。それは筆者が時事新報（のち産経新聞）の政治記者として、その間永田町を舞台に取材活動をつづけていたからだ。永田町ウオッチャーとして立場は第一線を退りぞきたいまも変わっていない。雨の日も風の日もまだ永田町界隈を飛びまわっている。

尾羽打ち枯らして巢鴨から釈放された岸の姿はあわれだった。しかし間もなく政界に転じ、日本再建連盟を結成して衆議院に打って出る。自民党に入党するやメキメキ頭角を現し、保守合同に際しては主役のひとりを演じた。鳩山内閣の幹事長となり、石橋内閣では外相をつとめ、石橋倒れて自ら首相のポストに坐る。岸内閣一二四一日、安保改正をお土産に政権を去る。まさに華麗なる轉身だった。

しかし、トップの座から降りると、苦心して集めた岸派を解散し、一騎当千の人材を惜しみなく手放す。サバサバしたものだ。それでも自民党最高顧問として節目節目の場面で大所高所から口を出していた。功成り名とげて、九十一才で白玉楼中の人となる。

筆者は岸の人柄、業績を公平に見て、戦後名宰相のひとりであったと信じる。しかし世間一般の受け取り方

はその反対だ。総じていえば歴代首相中で最低かそれに近い評定を下されている。国民的人気もパツとしなかった。本人も不本意だろうし、筆者も不服だ。

そこで岸内閣の再評価を試みることにした。資料は他に求めず、もっぱら筆者のメモと日記による。つまり筆者の体験とその記憶の上での岸の姿の再録だ。独断があり偏見がある。好き嫌いの個人的感情にも左右されよう。その意味ではなはだ不確かな岸内閣論になったかも知れない。しかし、この岸内閣論はこの目で見、この耳で聞いた生まの素材の上に成り立っていることだけは断言してはばからない。

なお筆者は自民党の「自民党四十年史」の編纂に当たって鳩山内閣編のまとめを委嘱され、その関係でしばしば岸と会った。幸いその時のテープが残っている。これが案外役に立った。

また事実関係をチェックし、日時の正確を期するため、巻末に記載する文献を参考にしたことを附言しておく。

二 権謀術数まかり通る大会

岸信介は保守合同をなしとげ、鳩山内閣を作ったのは自分だと確信していた。だから鳩山内閣のあとは岸内閣だということも信じて疑っていなかった。しかしこのユメは破れる。

自民党の総裁公選の歴史を書けば、それがそのまま戦後保守政党史になる。権謀術数がまかり通り、カネとポストのカラ手形が乱れ飛んだ。その中からひとりの権力者が生まれてくる。まことに血みどろの政治ドラマだ。

数ある総裁公選でも岸総才誕生の経過は圧巻というに足りる。鳩山のあと岸と石橋湛山と石井光次郎の三人が名乗りを上げた。大会で投票の結果、いずれも過半数を取るに至らず一位岸（二二三票）と二位石橋（一五一票）の決戦投票にもつれこむ。この時大会の舞台裏で仕組まれたのが二、三位連合だ。三位石井（一三七票）の票の大半が石橋に流れこみ、決戦投票では石橋（二五八票）岸（二五一票）で石橋が逆転当選した。その差わずか一七票にすぎない。岸は涙を吞んだ。

しかし岸は恨みごともしらず、石橋に協力する。筆者もこの大会を見ていたが、よく岸が石橋に協力したものだと思う。カネを使うのはお互いさまだ。この時、岸は一億円、石橋は六千万円、石井は四千万円使ったといわれる。当時ようやく国家予算が一兆円を越えたばかりの頃だ。同じ一億円でもいまの一億円とは価値が違う。

しかし、石橋の参謀をつとめた石田博英は大臣ポストの空手形を乱発した。たとえば五人の国会議員に通産大臣、八人の国会議員に農林大臣のポストを約束している。このため石橋内閣組閣に当たっては娘ひとりに婿何人の喜悲劇が各所に起きた。組閣完了までに十日近くを要したのはそのせいでもある。

いわばダメし討ちに遭った岸派は不満の固りだった。入閣をボイコットし、党内野党を叫び反主流を唱えた。それを押さえたのが一番不満の岸だった。

しかし、そのお返しはすぐくる。石橋が老人性急性肺炎で倒れたのだ。取りあえず外相の岸を首相臨時代理に指名して静養するが。病状好転せずそのまま石橋内閣は総辞職する。七十一日の短命政権に終わった。しかし石橋の出处進退はそれなりに立派だった。

かくて後継内閣のお鉢は岸にまわってくる。石橋内閣成立の功労者は三木武夫、池田勇人と石田の三人

だ。ひとことあつて然るべきだか、表だつては何もいわなかつた。いやいえなかつたのだ。総裁公選で惜敗し、しかも石橋に協力した岸には文句のつけようがない。石橋から岸への政権バトタッチは円満で、みんなから祝福された。こんな例は総才公選史上珍しい。

岸は家の子郎党に囲まれながら、上機嫌だつた。嬉しそうに前歯を見せて笑いながら「人間万事塞翁が馬だよ」といった岸の言葉を筆者はいまでも覚えている。

三 岸外交の本質とその展開

いま振り返ってみると、岸内閣は内政より外交重視内閣だつた。それは石橋内閣の外務大臣がそのまま総理大臣に昇格したのだから、そうなるのは当たり前だつたかも知れない。

その前に石橋内閣で岸が外相に迎えられた経緯について触れておく必要がある。石橋は結果として二三位連合の同志石井を党にとどめ、ライバルの岸を閣内のNo.1として選んだ。政党の論功行賞的人事からいえばスジが通らない。しかし、石橋は情実より能力本位だつた。石橋には吉田茂は日米関係を今日のものに築き上げたという頭がある。そして鳩山一郎は日ソ国交を回復した。だから自分は日中問題に全力投球する。その信念と使命感があつた。

石橋は中国問題では自信を持っている。しかし石橋内閣の基本外交路線はやはりアメリカ一辺倒でなければならぬ。そのアメリカに苦手意識を持っているのが石橋だ。石橋は吉田内閣の蔵相としてしばしばマッカーサー元帥ならびにその幕僚と衝突している。石橋は財政的見地から占領軍の費用をチェックすることさえ辞さ

なかった。石橋は占領軍に目の仇にされた。しかし石橋も負けていない。占領政策の批判に明け暮れる。

こんな経過があるから、石橋はアメリカによくないことを十分自覚していた。しかし総理大臣としてはそれでは済まない。そこでアメリカは岸にまかせ、自分は中国に取り組む。それが基本的な組閣方針だった。

その岸も実をいえば外交はしろうとだ。しかし鳩山内閣では自民党の幹事長として重光葵外相とともに渡米し、アイゼンハワー大統領、ダレス國務長官と会談している。当時ではそれだけでも外交の新知識扱いされたものだ。石橋はその岸の新知識を大いに買った。

さて、昭和三十二年（一九五七年）二月二十五日、岸内閣が成立すると、岸は早速五月から六月にかけて約二十日、ビルマ、インド、パキスタン、セイロン、タイ、台湾の六ヶ国歴訪の旅に出る。日本の首相として戦前、戦後を通じはじめての東南アジア外遊であった。

岸のカバンの中にはアジア開発基金と技術センターの設置、原水爆実験禁止の提唱が収められていた。アジア開発基金といっても日本にそのカネがあるわけではない。アメリカから引き出す考えだ。また原水爆実験禁止が世界で唯一の被爆国日本の外交の切り札であったことは今も当時も変わらない。「カネと核禁止」の日本外交のはじまりだ。

岸外交は日本とアメリカの固いきずなを強烈にアピールし、平和指向の基本姿勢を明確に印象づけた。しかし、台湾訪問の事実と、蒋介石総統との会談は中国を刺激し、日中関係を悪化させた。岸内閣の四年間を通じて中国は岸の鬼門となる。この時の会談でも岸は蔣の大国進攻を指持し、日本の共産化があるとすればソ連より中国からの方がおそろしいと直言してはばからなかった。これでは中国が不快感を示すはずだ。

東南アジア歴訪が終わると岸はワシントンに飛ぶ。「日米関係の新時代」が岸のキャッチフレーズだった。

ソ連傾斜に終始した鳩山時代の冷え切った日米関係の修復と、吉田政権当時の占領下の従属的立場を、自主的かつ対等な次元に引き上げる。それが狙いだった。

四 藤山と田中（角）の登用

岸はアイゼンハワーから過分の待遇を受ける。着いたその日にホワイト・ハウスに表敬訪問すると、ひるめしの御馳走になり、そのあとゴルフと一緒にプレイする。岸がゲストだから最初にティ・ショットを試みる。万一チョロをやったら国威にかかわる。「那須与一の心境になって八百万やゑろずの神々に祈った」とは岸のひとつ話だ。しかしこの一打はその日最高のショットだった。勝負はめでたく引分けに終わる。

このあと、二人は真裸になってシャワーを浴びた。湯をジャージャーかけながら向い合って話をする。まさに裸と裸のつき合いだ。そのせいか岸は終生アイクを敬愛してやまなかった。それに反しマッカーサーについては高く評価していない。もともと、マッカーサーとは裸のつき合いどころか、一度も会ったことがなかった。

このようにアイクとはウマが合ったが、ダレスはケンもホロホロだった。正式会議で小笠原の施政権、沖縄返還を持ち出すが、ダレスは日本にその実力はまだないと取りつく島もない。わずかに日本の潜在主権を認めるにとどまった。たとえば日教組の活動すらチェックできない日本には教育権さえ返せないという調子だ。

またせめて、沖縄県民の民生や福祉について日本政府が予算を出したいという要請にたいしては、注文があるならアメリカ政府にいつてくれ、予算はアメリカが組むと相手にしない。いまの日本側の米軍にたいする思いやり予算を思うと隔世の感がある。

しかし収穫もあった。共同コミュニケの中で米軍の陸上部隊の撤退が盛りこまれている。これは日本側の要求とアメリカ側の反省がまさに一致したからだ。日本各地で犯罪やトラブルを起し、行政協定上の問題になるのはきまって陸軍の米兵だった。アメリカは海軍と空軍を残し陸軍を引き揚げる。日本とアメリカの意見がめずらしくドッキングしたわけだ。

岸としては望んだことの半分も達成できなかった思いだ。しかし、岸はガッカリしない。逆に斗志をかき立てる。アメリカから帰ると内閣改造を断行し、それまでの石橋内閣から借りものの陣容を一新し自前の内閣を作る。第二次岸内閣の目玉は藤山愛一郎の外相だ。

岸と藤山の関係は戦前にさかのぼる。二人で力を合わせて東条内閣を倒した仲だ。岸が巣鴨から無一物で出てきた時、藤山は自分の会社の重役に迎えた。返礼でもあるまいがこんどは岸が藤山を政界に引き出す。単なる友情物語ではない。

岸はアジア関係も対米外交も経済が中心だと考える。岸は藤山の経済人としての感覚と能力に期待した。かくて絹のハンカチは泥にまみれるが、安保改定は藤山の手で成る。岸の眼力は正しかった。

その外に岸は三十九才の海のものとも山のものとも分らない田中角栄を郵政相に起用している。田中はそれを機に着々と実力を発揮し、やがて天下を握る。岸は驛馬角栄を見出した伯樂でもあった。

岸はもっぱら外交に意をそそいだが内政をおろそかにしたわけではない。たとえば組閣直後の伊勢神宮参詣に際しての記者会見で三悪追放を打ち上げた。つまり暴力、汚職、貧乏の三悪を許さないという宣言だ。

三悪追放は決してスローガンに終わらなかった。暴力にたいしては警職法、汚職については斡旋収賄罪、貧治退治には所得倍増とそれぞれ手を打っている。もっとも警職法は途中挫折し、所得倍増は池田内閣に功を奪

われたが、レールをきちんと敷いたのは岸だ。

それから、昭和三十二年暮の国会で道路関係三法案を成立させ、道路整備の五十年計画がスタートする。穴ぼこだらけの日本の道路が見違えるようになるのはそれからだ。日本の道路を近代化したのはオレだと田中は威張るが、その前に岸がいたことを忘れてはならない。

五 警職法の挫折

岸は見通しのいい政治家だ。見通しが外れたのは大東亜戦争の敗戦と、東京裁判で覚悟の死刑を免れたことぐらいだ。安保改定についても、口に出している以上は成算はあった。外交は内政と連動している。岸にとって安保と警職法はワンセットだった。警職法とは警察官職務執行法改正案のことだが、岸は暴力追放の立場からも、安保成立後の国内左翼勢力のハネ上りを押える意味でも警職法改正を強く望んでいた。

しかし、これを表沙汰にすると、それだけで野党とマスコミの反対を受ける。国会提出前につぶされてしまうおそれがある。だから極秘裏にことを運んだ。党の三木武夫、河野一郎、大野伴睦などうるさい実力者にさえ漏らさなかった。

しかし、これが裏目に出る。昭和三十五年秋の十月七日の持ちまわり閣議で同条を決定すると翌八日に国会に提出する。電光石火の早わざだった。しかし、マスコミが叩き、野党が噛みつき、党内もでさわぎ出した。それでも岸はたじろがなかった。強引に中央突破を図る。社会党の審議妨害の時間稼ぎたいしては三十日の会期延長を以って対抗した。しかし、さすがの岸も四面楚歌の中ついに刀折れ矢尽きて断念する。「根まわし

をしておくべきだった」岸は後年になってからくやむがあとの祭りだ。

安保改定はなんとか批准にまで漕ぎつけるが岸内閣はデモ隊に取り囲まれ退陣を余儀なくされる。言葉を変えていえば、岸は左翼暴力の前に倒れたことになる。

またアイゼンハワールの訪日も、フィリッピンのマニラまで来ていながら、とうとう東京の地を踏むこともなくキャンセルされた。これも、当時の警備陣では羽田空港に降り立つアイクと、それを出迎える天皇陛下の二人の安全を守る自信がなかったからだ。岸はそれでも諦めない。防衛庁長官の赤城宗徳に自衛隊の治安出勤を要請する。しかし、赤城は「自衛隊はまだ同胞を撃つ訓練を受けていない」と承知しない。岸としては断腸の思いだった。

六 安保騒動の実態

いま振り返ってみると、昭和三十四年の五月十九日の衆議院会議で自民党が安保改定を単独採決してから、同六月二十三日新安保条約が発効するまでの一ヶ月余はたしかに日本は革命前夜の観があった。筆者はいまの衆院第一議員会館の場所にあった記者会館二階の時事新報デスク席から、つぶさに国会と首相官邸を取りまきジグザク行動をくりひろげているデモ隊を見ていてそう思った。

しかし、革命的現象は永田町の一角に限られていた。坂ひとつ下の皇居周辺、その先きの銀座界隈はいつもと少しも変わらない。だから、岸が辞めると、さしもの連日のデモも、潮の引くように姿を消してしまった。

安保騒動の実体は、反米ではなく反岸だった。岸はそのあたりをしかと読んでいた。だから身を引くことに

よってデモに肩すかしを喰わせたわけだ。

これに反し社会党の浅沼稻次郎書記長は自らデモ隊の先頭に立ち、民衆の盛り上るエネルギーをバックに安保粉碎、岸打倒を本当に信んじ、その先に社会党政権の樹立をユメ見ていた。六月十五日、デモ隊の樺美智子が国会構内で圧死した時は「革命成れり」と思ったかも知れない。

事実、世論は湧き上った。しかし岸はその十日後に総辞職する。安保さわぎもそれまでだった。結果論からいえば、樺の死は岸を辞めさせた。しかし岸は辞めることによって革命を未然に阻止した。岸の方が浅沼より役者が一枚上だ。

岸はデモ隊に包囲されて官邸にカン詰めになっていた。この間にいくつかのドラマが起きる。岸の本質を知るためにそのひとつふたつに触れておかなければならない。

七 岸の死生観

そのひとつは岸の死生観だ。岸は戦争に負けるまでは苦勞知らずだった。山口の名家に生れ、一高東大を優秀な成績で卒業し、エリート官僚の道をひたすらに歩きその頂点を究めた。

しかし、敗戦は岸の順風満帆の運命をガラリと変える。A級戦犯として巣鴨に収監される身となった。A級戦犯には陸軍大将、総理大臣の東条英機はじめ戦前戦中の高位高官がズラリと列んでいる。みんな元気がない、だれもがしょんぼりしている。その中で岸だけが意気軒昂としていた。

ブラスバンドを先頭にして巣鴨に賑やかに乗りこんできた同じA級戦犯の右翼の大物笹川良一は、岸の立居

振舞を見て、「これは豪傑だ」と感嘆している。

岸は巢鴨に入る時は死を決していた。どうせ死ぬものなら大東亜戦争の意義を明らかにし占領政策の誤りを正した上で堂々と吊られようとした。

岸は戦争には反対だった。しかしひとたび戦争をはじめた以上勝たなければならない。だから東条内閣の閣僚として全力を尽くした。岸は元来が自由主義者だった。その岸が統制経済の推進の役を買って出る。そのため「アカ」のレッテルさえ貼られた。統制経済は戦争に勝つための手段だ。決してそれ自体が目的ではない。岸はその信念の下に、聖戦必勝にまい進した。今でも悔いることはない。岸が山口から巢鴨に向かう時、一首の歌を残している。

名に代えて聖戦ひじりいくさの正さを

万世よろずよまでも語り残さむ

岸は昭和の吉田松蔭の心境だった。しかし岸は巢鴨に三年間閉じこめられたが、証言台に立つまでもなく、未起訴のまま釈放になった。岸としてはあるいは不本意であったかも知れない。しかし、これが余生を政治に捧げ、もう一度国のために御奉公しようとの動機になる。一度死んだのだから、あとの命はもうけものだ。いつ死んでも構わない。これで根性が定った。

釈放となったが、カネも身分もなにもない。岸はドン底から這い上がった。やはり頼りになるのは肉親だ。たまたま弟の佐藤栄作が吉田内閣官房長官として時めいていた。岸は佐藤の世話になる。世話になりながら佐藤の地元の山口県二区から立候補する。同じ生まれだから仕方がないといえばたしかに仕方ない。しかし出る方も、出られた側も、最終的には二人当選の確信があった。二人の間に骨肉の争いの意識はない。ただ二人の

周囲は他人だ。岸、佐藤の両陣営の間では選挙毎に血の雨が降った。

八 昭和政治の名場面

官邸がデモの包囲に陥ったため、警視總監から退避の勧告があった。官邸がダメならどこどこに逃げても同じだ。同じ死ぬなら官邸で死ぬ。岸はハラをきめて籠城した。それについてきたのは大蔵大臣佐藤ひとりだった。佐藤は「兄さん今晚ここで死のう」と大きな目玉をギョロリとさせながら岸に語りかける。岸もしんみり「うん、そうしよう」と答える。ちよつと芝居めくが昭和政治史の名場面のひとつだ。

岸は新安保の批准とともに内閣を投げ出すが、あとのことをいろいろ考え悩んでいた。弟の佐藤より可愛っていたといわれる農林大臣の福田赳夫に相談する。この時、福田はひとつのアイデアを出している。それは福田が若い頃、大蔵省からロンドンに派遣されていた時、実際に見聞した政権交代の例だ。保守党のボルドウィンが労働党少数派のマクドナルドを首班にして協力内閣を作り、金本位制離脱の危機を乗り切った。この故事に見るように日本も岸のあと自民党のだれかにトライまわしというわけにはいかない。たとえば。社会党から分裂したばかりの民社党の西尾末広を担いで自民党が与党となって助ける。それくらいの人心一新策でも取らない限りこの危機は突破できない。これが福田の策だった。

社会党から反動だタカ派だと悪罵されていた岸がこの話に耳を傾ける。そして福田を使者にして西尾のところに出す。福田は官邸を抜け出し前後三回西尾と極秘裏に会った。はじめ色気を見せた西尾も最後には断ってきた。これが「幻の西尾首班」の真相だ。

つまりいまから三十六年も前に岸は自社連合政権の壮大な実験を試みようとしたわけだ。その意味で村山前政権は突然出現したものではない。

岸は社会党から終始攻撃を受けた。そのため岸内閣は各所にダメージを受けている。しかし岸もやられていくばかりではなく、それを上まわるお返しを忘れなかった。

そのひとつが、この幻の西尾政権だ。幻の西尾政権の延長線の上に村山前政権があった。それは社会党最後の政権になった。社会党は社会民主党と名前を変え永田町から永遠に姿を消した。社会党にトドメを刺した最初の一太刀は岸の手柄にしなければならない。

九 憲法改正の鬼

鳩山一郎は生粋の党人政治家だ。官僚育ちの岸とは肌合いが違う。しかしこの兩人は政治的にはきわめて相似している。憲法改正に対する情熱と行動がそれだ。

鳩山には外には日ソ交渉、内に小選挙区制の達成を指向した。何のための小選挙区制かといえば憲法改正するためだ。憲法改正に必要な三分の二の絶対過半数を制す。それ以外の何ものでもない。しかし小選挙区制は鳩山時代には達成できなかった。岸時代でも不可能だった。というこは憲法改正が見送られたということだ。

兩人の無念察するに余りある。

しかし、鳩山は内閣に憲法調査会を設置した。その第一回の会合を開かせたのは岸だ。社会党は調査会の設置そのものが改憲につながると反対し、設置されてからも社会党に割り振られた委員をひとりも送らなかった。

た。鳩山はそれにたじろいだが、岸は頓着なしにスタートさせた。出てこない社会党がわるい。それが岸の論理だ。憲法調査会はぼう大な資料を残して解散した。そのお蔭でいま改憲の材料に不足はない。

岸は昭和四十四年に自主憲法制定国民会議を作った。自らその会長におさまり、死ぬまでその職にとまった。岸以後、憲法改正の旗を堂々と掲げ、それを正式に口にしてはばからなかった自民党の総理総才はいない。岸は憲法改正の鬼だった。

小選挙区制は憲法改正のための頭数を揃える手段に違いないが、岸の場合はそれだけではない。議会政治家としての岸の理想は二大政党対立による政権交代だ。岸は戦前の大正デモクラシーを知っている。政友会・民生党の攻めぎ合いを見てきている。しかしそれは二大政党のあしき対立だった。マイナス面ばかりが表面に出た。戦後政治はまさにプラス面の二大政党対立で運営されなければならない。

そのために小選挙区制が必要なのだ。小選挙区制ではしばしば一党独裁型になる。強い政党に人が集まるからだ。岸はそんな場合は反対党にほとんど人材を流せばいいと考える。自民党の公認候補で小選挙区が満杯になれば、あぶれたものは社会党から出ればいい。社会党の自民党化であり、一種の社会党育成論だ。

その小選挙区制も平成になってから実現した。もつとも半分は比例代表並立制だから、岸の望んでいた単純小選挙区制とは違う。すぐ二大政党時代にはならない。しかし何回が繰り返しているうちに二大政党に収斂されていくだろう。

だがその二代政党は保守と革新ではない。保守と保守だ。社民党はその以前に、そのどちらかの中に埋設してしまっているはずだ。政権も保々政権となれば四百人前後の超強力内閣となる。その時にはじめて憲法改正は現実の問題として政治日程の上に登場する。岸内閣のやり残した宿題の答えがその時に出るわけだ。

十 不人気のいくつかの理由

このように岸首相は楽天的で、岸内閣は堅実に仕事をした。ところが世評とか人気とかいう点ではさんざんだ。もっと評価され喝采されていいとおもうのだが、実際には逆現象を呈している。どうしてそうなったのか。もちろんそれにはいくつかの理由がある。

ひとつは岸の外観、もうひとつは岸の個性だ。それにさらに岸の経歴が加わる。岸の風貌は鳥に似ている。決して人に好感を与えない。しかしこれを岸の責任に帰するのは酷だ。天をうらむしかない。しかし政治家としてはソンだった。永田町で不死鳥といわれ、マスコミから妖怪扱いされたのもその容姿からきている。

岸の信念や実行力も誤解された。岸は国のためになると思ったら、国民に媚びない。オレについてこいのタイプの指導者だ。いい意味での戦前のエリート官僚の気骨を最後まで持っていた。しかし戦後民主主義の世の中でははやらない。同じ官僚でも吉田茂型と重光葵型がある。吉田は明るく、重光は暗い。岸は吉田に近いキャラクターだ。しかし、吉田の愛嬌とユーモアはない。英国ではユーモアは政治家の必要不可欠の資質のひとつだ。岸に吉田ほどの拍手がこないのはそのせいでもある。

それに岸はまぎれもなく東条内閣に名をつらね開戦の詔書に副署した。そして東条内閣の軍需大臣として戦争遂行に挺身した。それが国民の胸にどうしてもひっかかる。政治家にとってはこんな大きなハンデキャップはない。しかし岸はそのハンデを克服して、日本の最高権力者にノシ上った。それはまた、岸は東条に協力したかも知れないが、その東条を倒したのも岸に外ならなかったという国民の認識があと押ししていたことは否

定できない。とにかく波瀾万丈の一生だった。

十一 岸政治はサムライ政治

ここで総括すれば、岸政治はサムライ政治だったということが出来る。サムライ政治とは外交では安保改訂、内政では憲法改正を正面の目標に掲げ、その目標達成のために全力を傾注する政治のことをいう。

吉田もサムライ政治家だった。鳩山もサムライ政治家だった。しかし前者は占領下の首相であり、後者は病弱だった。持てる情熱とエネルギーの総力を結集してこの二つの目標に体当りして玉砕したのは岸だけだ。国会で臆面もなく「政策としては核兵器を保有しないが、憲法としては自衛のため最小限の核兵器を持つことは差支ない」と答弁し、議場を混乱させた岸以外の首相を筆者は他に知らない。

岸のあとの池田内閣は、安保も憲法もタナ上げにして、経済だけにターゲットをしぼりこみ、ひたすら高度成長路線を走りつづけた。その過程であちこちかべにぶつかったが今日の経済大国日本はその上に成立している。その代り国民は安保も憲法も忘れ、政治は町人政治になり下がってしまった。

しかし、岸は経済に無関心だったわけではない。岸は元来が経済閣僚だ。戦前「モノ」の統制に関しては岸の右に出るものがいなかった。だから、戦後の経済復興に際しては、一番敏感に反応し、一番早く具体的対策を立てている。

たとえば所得倍增政策にしても、それを最も早く構想してして打ち出したのは岸だ。「国の経済規模を十年で二倍にする計画」がそれだ。岸はこれを経済審議会に諮問している。審議会は三つの部会と十七の小委員会

を作り、政府職員、学識経験者二百五十人を動員して作業の結果「国民所得倍增計画」を答申した。しかしその答申の四ヶ月前に岸内閣は退陣し池田内閣の時代になっていた。

この答申を受け取った池田はあまりいい顔をしなかった。十年で倍增では規模が小さすぎる。そう思っていたのかも知れない。しかしこれに飛びついたのが太平正芳、宮沢喜一の池田側近だ。それを池田内閣の一枚看板に仕立て上げる。

佐藤内閣の沖縄返還もそうだ。返還を実現させたのは佐藤だが、そのタネまいたのは岸だった。佐藤はその功によりノーベル平和賞を貰った。その半分ぐらいは岸の功績に帰してもおかしくない。

歴史に「もし」は許されない。しかし、もし昭和三十五年一月十九日の安保調印のあとに解散して国民に信を問うていたらどうだろうか。安保騒動もなかったろうし、石以って追われる如き総辞職も避けられたのかも知れない。

このことはひとつの「悔恨」として岸の頭から終生離れなかった。

参考文献

岸信介回顧録	岸 信介	広済業
岸信介の回想	岸 信介	
	矢沢 一夫	文芸春秋
	伊藤 隆	
二十世紀のリーダー	岸 信介	サンケイ出版
岸政権、一二四一日	大日向一郎	行研
正伝 佐藤栄作（上下）	山田 栄三	新潮社

回顧九十年
内閣制度百年史
資料・戦後日本の経済政策構想

福田 赳夫
同編纂委
有沢広巳

岩波書店
大蔵省印刷局
東大出版会